フェイド

アンテナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェイド

【Ｎコード】
Ｎ９７２６Ｇ

【作者名】
アンテナ

【あらすじ】
仕事は「人を狩ること」。分かりやすく言うと「悪魔」かな。感情をなくしてしまったリーフがある青年との出会いで少しずつ感情を取り戻していく・・・。

～プロローグ～（前書き）

この物語はフィクションです。

～プロローグ～

私の名前はリーフ。別名「紅葉」
私の職業は「人を狩る」事。
分かりやすく言うと“悪魔”かな。
人の魂を狩り、その魂を死神に売り捌く。
それが私の仕事。

「リーフ。リーフはどこだ？」
総帥が私の事を呼ぶ。その時は私の仕事の時。
「ここです。総帥。」
「リーフ。今回の仕事だ」
そう言って渡される一枚の紙と写真。
写真に写っていたのは、大人っぽい顔をした青年だった。
「分かりました、総帥。」
自分と同じ年くらいの人を殺すのは、あまり気が乗らないが、やるしかない。

私は黒いマントをはおり、大きな鎌を持って外へと向かった。
外は真っ暗で月の明かりと薄暗い街灯だけが頼りだ。
空には綺麗な星が輝いていた。
何だか心が痛む。
でも人を殺すのにいちいち感情を持っていたらきりがない。
何度も魂を狩っているうちに段々悲しいや嫌だという感情は薄れていった。

「早く仕事をしなくちゃ・・・。」
ポケットにしまっていた地図を出そうとすると・・・。
「あれ・・・？ない・・・」

ゴソゴソとポケットの中をあさってみるが何一つ入っていない。
「嘘っ！！地図がなくちゃ仕事ができないよ！！！」
薄暗くて見えにくいがそれらしきものは落ちていない。
「どうしよう・・・」
これでは今まで築き上げてきたものが水の泡になる。
全身に寒気が襲ってくる。
「どうしたのですか？」
私は声がする方を振り向いた。
「地図をなくしてしまって・・・・」
「地図を探しているのですか？」
「はい・・・。」
その声はとてもきれいな声で、眠ってしまいそうなほどだった・・・。

「僕の家が近くにあるんで取ってきますよ」
その時薄暗かった街灯が急に明るくなった。
顔がはっきりと分かるくらい。
写真の人だ・・・。
写真で見るよりずっと大人っぽくてかっこいい人だった。
「もう夜中ですしここにいるのも危険ですから一緒に行きましょう」
私は言われるがままにその人についていった。

～第二話～（前書き）

～前回までのあらすじ～
総帥に頼まれて仕事をしようとしたけど、地図をなくしてしまったリーフ。夜に出会った青年は「狩る」べき人だった！？？

～第二話～

ついてきてなんだけど・・・本当についてきてよかったのだろうか？
相手は仮にも初対面・・・。
内心「でもまぁ・・人間だから大丈夫か」

「着きました。ここで待っててて下さい」
目の前にそびえたつ大きな屋敷。周りの家と次元が違うかのようにも見える。
私は応接室（？）らしき場所に通されると、ふかふかしたソファに、腰をかけた。

「本当に大きな屋敷・・・」
辺りを見渡してみると、大きな壺があったり、銅像があったり・・・。

「お茶は如何ですか？？」
気がついたらメイドさん横に立っていた。
髪の毛は茶色が少し明るくなった感じの色で、長さは短め、顔立ちがとても華やか。
地図を借りに来ただけなのにお茶をもらうのもおかしな話・・・。

メイドさんは私の答えを聞かずに、お茶を差し出した。
「どうぞ」
「・・・・いただきます」

味は不味くはない。でもなんか・・・薬っぽい匂いがする。
「あの・・・このお茶なんの葉っぱですか？？」
おそるおそる聞いてみた。
「その葉っぱはダージリンの葉っぱです。」

おかしい・・・。ダージリンって飲んだことないけど、紅茶は大体味は一緒のはず・・・。
「これ・・・何か入れました??」
メイドさんは一瞬顔が強張ったがすぐに笑顔になり・・・。
「いえ。何も」
と答えた。

「お待たせしました」
青年が部屋に戻ってきた。
何かがおかしい・・・。
地図を取りに行ったはずの青年の手元には地図らしきものが見当たらない・・。
ポケットに入っている様子もない・・・。
もしかして今、危険な状態・・・??
「私そろそろ・・・」
「まってください」
青年が呼びとめる・・・。
確実に危険な状態だと私は覚った。
「ただで帰すわけにはいかない、「紅葉」」
なんでその名前をっ!!
私はソファから勢いよく立ちあがった。
そして扉へと走ろうとした・・・・。
が、全身に激痛が走りその場に立ちすくんでしまった。
「っく・・・」
「苦しそうですね」
きっとあの紅茶のせいだ・・・
薬か何かを混ぜたのだろう・・・。
「逃がしませんよ」
青年は黒い笑みを浮かべていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9726g/

フェイド

2010年10月28日03時52分発行